アカデミック・ジャパニーズを考える

武蔵野大学　佐々木瑞枝

Ⅰ　まず問題意識あり

この数年、留学生に日本語を教えながらずっと考えてきたことがある。「日本語を通じて異文化との豊かな出会いがあり、しかもコミュニケーションに役立つ教材とはどのようなものか」という問題である。

日本語の教材は、日本と世界を日本語で結ぶ「コミュニケーションの「水脈」」であり、その水脈の水は適当なミネラルとカルシュームを含んだ味わい豊かなものであることが望ましい。

初級の日本語レベルでの教育は、かなり教材も充実してきているので、教育する側も自分の日本語教育観に則り、教材の多様な組み合わせができる。しかし、中級以上の学習者に対しても同様のことが可能だろうか。「自分は、日本語という言語をどう捉え、どう教育したいか」と自問自答しながら教材を選ぼうとする時に、ハタと行き詰まることがある。確かに中上級と銘打ったあらゆる教材が出版されているように思える。しかし、以下のような視点で網羅的に編集された教科書はなかなか見つからない。

①大学生を読者対象とし、大学生が教養的知識として必要とする内容であること
②コミュニケーションを重視していること
③初級教材で学んだ「文法」を中上級で確かなものとするための教材であること。
④大学生活で必要な会話などが盛り込まれていること。
⑤副教材として必要に応じて使い分けできるよう、少なくても１０冊くらいからなるシリーズ教材であること
⑥発音することを考慮に入れた CD などがついているか。
⑦語彙や文法のルール違反を取り締まるのではなく、やさしく説得するタスクやコラムがあるだろうか。

以上の７つをクリヤーしたとして、次の点ではどうだろうか。

⑧教材が海外で使われた時のことが視野に入っているだろうか。
(たとえば、中上級教材に「わが国では・・・」といった表現が使われていることがある。」外国人留学生にとって、この「わが国」という表現がどんなに異質に響くかを考えたら、とても教材には使えない表はずである)。
⑨インターアクションを引き起こすしかけが教材にあるだろうか。

J.V.ネウストプニー（２０００）は、『今日と明日の日本語能力』の中で「文法外コミュニケーション能力」について、次のように述べている。

> 「いつ話していいか、いつ話さないか、何を話すかあるいは書くか、どのようなコミュニケーションのネットワークを作るか、どのような身振り手振りをするか、どのように自分の間違いを直すか、このような数多くのルールもここで考える必要があります。」

この言葉は実に示唆的であり、日本語の教材に異文化の視点が必要であることを、再認識し、異文化のまなざしを組み込んだ教材作成の必要性を痛感する。
「異文化」という点について考えてみる。

1　よく問題にされる「日本の文化的特質」(たとえば、『菊と刀』にあげられる「恥の文化、罪の文化」という二分法、「甘えの構造」、「縦社会」など）が果たして日本に固有に存在するものなのか、それとも普遍的なものなのか、先入観や感覚的な要素にとらわれるのではなく、実証的なデータを使って教材にすることは可能だろうか。(注１）(注がありません！)

２　自文化中心主義による思い込みや、歴史的に「決定」されているとみられる要素を再構築できる、普遍性をもつ枠組みでの教材の作成はできないか (特に「日本事情」「異文化間コミュニケーション論」といった領域を視野に入れて)。

３　「比較する」という認識を常に土台においた、揺れ動く国際関係の現場の中での「異文化を視点に据えた教材の作成」とはどのようなものだろうか（これは、作成できたとしても、国際関係の変化の中で、次々に改定していかなければならないだろうが)。

４　「言語の文化的背景の理解」を視点においた教材とはどのようなものか。

5　日本人に普遍的とはいえない若者独特のノンバーバル・コミュニケーションや携帯電話で使われる記号文字の理解は外国人学習者にとって必要か (認識できないばかりに、若者社会の中で不適応現象が生じるとするなら、それらも教材にすべき要素なのではないか)。

Ⅱ　プロジェクトチームの結成から教材を生み出すことへ

ここまで考えると、たとえ中上級レベルの教材だとしても、何を素材とし、どんなテーマで何を共に学び・考える教材とするのか、袋小路にいきあたってしまう。
議論していても、何も生まれない。１９９８年、私の日本語教授法講座の門下生を中心とする現職者日本語教師グループに声をかけ、研究プロジェクトをスタートさせた。
以下に紹介するのは、そのプロジェクトチームにおけるディスカッションを重ねた結果から生まれた問題集や教材である。

１　『アカデミック・ジャパニーズ対応　日本語パワーアップ総合問題集　レベル A(上級対象)』佐々木瑞枝＋横浜日本語研究会著　２００２年　ジャパンタイムズ刊
２　同上　レベル B(中級対象)
３　同上　レベル C(初中級対象)

日本で出版された書籍で、「アカデミック・ジャパニーズ」という、これからの日本語教育が向かうべき一つの方向を示したものは、私の知る限りこの問題集が最初だと思う。日

本語教育の世界では、学習者が多様化していく中で、誰に焦点をあてた教材かを明確に示す必要に迫られていた。この問題集は、「アカデミックな日本語力」を求める外国人学習者(大学生で学ぶ留学生が中心になる)を常に見つめながら、構成されている。

「はじめに」より
「この問題集は、一冊で日本語を勉強している皆さんの総合的な力を判断し、項目別に能力を「パワーアップ」できるように、さまざまな新しい工夫がされています。
　大学などの高等教育機関で学ぶ留学生に求められるアカデミックな日本語力を意識して作られた問題集ですから、これまでの「理解中心型」から「応用力重視型」になっています。
　問題は予測したり類推力を必要とするもの、さまざまな情報を取捨選択するもの、日本語学習者が大学に進学した時に必要とされる知識を測るものなど、自分のウイークポイントを発見し、学ぶ目的も果たせるように作成されています。」

　ここで、われわれのプロジェクトの目的を振り返ると、いくつかの点は問題集に盛り込めたが、多くは問題集の限界がり、達成されていない。
①「大学生を読者対象とし、大学生が教養的知識として必要とする内容であること」は、漢字や語彙だけではなく、トピックという点からもかなりの達成度だと思う。
②コミュニケーションを重視するという点についても、自己評価も他者評価も高い。コミュニケーション能力については、「情報を正確に聞き取ろう」「キーワードを整理しよう」「話の内容を聞き取ろう」「話の内容から類推しよう」という項目で取り上げ、また「話の内容から類推しよう」では、「依頼の表現」「断りの表現」「提案の表現」「応対のバリエーション」「話の結末を類推する」「あいまいな表現・内容を正しく理解する」など、会話のパターンや話の内容から、様々な状況を類推する力を養成することを目的としている。これら項目は、海外で学ぶ学習者に多くの支持を集めたようだ。(アメリカでの評価については後に紹介する。)
③初級教材で学んだ「文法」を中上級で確かなものとするという点は、「問題集」という性格から機能語が中心であり、「文法」にはほとんど触れていない。後の課題としたい。
④大学生活で必要な会話として、キャンパスライフの場面を盛り込んだ。
⑤副教材として必要に応じて使い分けできるような複数のシリーズ教材であるという点では、能力に応じて上に「パワーアップ」できるように３つのレベルに応じている。
⑥発音することを考慮に入れた CD などがついているか。一ついている。
⑦語彙や文法のルール違反を取り締まるのではなく、やさしく説得するタスクやコラムという面では、「教師の方へ」として、使用する教師の立場にたった解説を心がけた別冊をつけた。
　以上の７つのうちの６つをクリヤーしたとして、次の点ではどうだろうか。

⑧教材が海外で使われた時のことが視野に入っているだろうか。

この点では、作成する段階で、常に「海外で使った時にどういう感情で、その内容を把握するだろうか」ということを視野に入れている。当然のことながら、戦争の話題などは避け(歴史認識という点では必要だろうが、問題集としては必要ないとの観点から)、また、コンピュータ用語なども、普及度を考慮して必要最低限の話題にとどめている。

⑨インターアクションを引き起こすしかけが教材にあるだろうか。

あちこちに、しかけが施されている。たとえば、B レベルの問題集では、携帯電話の代表的な４社を取り上げ、その特徴から４人の人たちの意見を聞いて判断する問題があるが、「これは本当の意見ですか」「私も〇〇さんの言うとおり、平日の値段の安いものを申し込みました」など、実際のアクションへと結びつくしかけである。日本人学生にきいて判断するという素材としても、現代日本の文化を問題集に取り入れ、それが「しかけ」となることを著者側は願って作成されている。

「謙遜すること」が日本人的な発想であると言われるが、科学研究費の報告書は成果が期待されているものであり、ここでは「謙遜」よりも、「堂々と成果を発表すること」にした。

しかし、問題集３冊に盛り込める内容は、ページ数にも制約があることから限界がある。以下はアメリカの「全米日本語教師連盟」が出しているニューズレターVolume35 Japanese Language and Literature(２００１年４月）の書評である。

(以下の英語の部分にもたくさんミスタイプがありましたが、直しておきました。それにしても、アンダーラインと番号の意味を説明してくれないと、何のことやら分かりません。)

日本語パワーアップ総合問題集　A/B(Integrated Exercises for Japanese Language Proficiency Level A/B
By Mizue Sasaki et al. Tokyo: The Japan Times, 2000.124 pp.¥1.800
(accompanied by a CD)

reviewed by Atsushi Fukuda and Emiko Ito

two exercise books are part of a series developed primarily as preparation materials for the Japanese Language Proficiency Test (hence-forth JLPT). Each book is accompanied by an answer key booklet and an audio CD for listening exercises. The answer key booklet also contains the scripts for the audio materials and a short teacher's manual.

According to the teacher's manual, Level A covers Level 1 of the

JLPT, while Level B is for Levels 2. Level C, which is not under review here, is written for elementary- and intermediate-level learners. The authors claim that the series is closely geared to a new proficiency test being developed to replace the current JLPT. Also noteworthy is the fact that the authors included materials that are outside the scope of the JLPT whenever they thought doing so was warranted (mainly in the vocabulary section).

The sound quality on the audio CD's is good, and the quantity of audio materials is plentiful. The Level A CD contains 73 minutes and the Level B CD 68 minutes. The exercise books are organized as follows.

Part 1: Placement Test
Part Ⅱ : Ⅰ Listening
Ⅱ Reading
Ⅲ Kanji and Vocabulary
Ⅳ Function Words

These exercise books are unique in two ways. First, they begin with a "placement test " designed to find weaknesses and gaps in the learner's knowledge and skills.(Technically speaking, given the purpose of this test, it probably ought to have been called a diagnostic test.) The test consists of four sections; kanji and vocabulary, listening comprehension, grammar, and reading comprehension. Once the test is taken and scored the learner is guided to word on certain exercises depending on that he or she missed. This feature, somewhat reminiscent of computer-based materials, would be useful for learners who wish to brush up on their weak areas in short amount of time, say, right before taking the JLPT. Second, the authors have attempted to incorporate academic Japanese into the reading section. Level A covers law, economics, information processing, and environmental studies, while Level B covers sociology, Japanese literature, and information science. Reading passages used in the academic Japanese section are excerpts from college fresh-man- and sophomore-revel introductory textbooks and reference works, and newspaper articles of roughly the same level. Therefore , the authors claim that the questions based on these passages do not necessarily require technical knowledge in each discipline.

We found the listening questions to be very well thought out. Particularly

noteworthy are those questions that ask the learner to make inferences based on conversations.①

These questions are likely to help foster the learner's communication skills. As mentioned above, the audio recording is crisp and clean studio quality, but it might have been useful to include some conversations that contain natural environmental noise and/or natural deviations from perfect utterances (e.g. false starts and hesitations).②

The reading section contains curious exercises ranging from task-based activities to intensive reading. It also includes academic reading, as discussed above. The passages chosen are somewhat short and may be seen by some as unsatisfying in that respect.③

The Kanji and vocabulary section is broken into eight topic areas, such as politics, economics, and mass communication. Each subsection has a list of basic vocabulary items to learn, following by three sets of multiple-choice questions. The basic items listed, however, do not necessarily appear in the questions. The questions ,therefore, present additional vocabulary. No translation or explanation is provided for any item, and many items appear isolation. ④

Thus, this section would be useful in mentally organizing items the learner is already familiar with, but not so useful in acquiring new ones, especially in a self-study situation.

The final section is devoted to "function words" which is to be very broadly understood as including even the honorific forms of verbs. These items are classified into eight categories, such as time, topicalization, emphasis, degree, relation, and assertion. This section is similar to the last section, with a list of items to learn followed by questions, but different in that the items listed appear in the questions in context. Since no translation or explanation is provided for any item, the learner is assumed either to be more or less familiar with them already or to have access to other learning resources such as grammar reference books and tutors. Items presented in Level A include 'ya ina ya' 'as soon as '(time), 'taritomo' 'not even ' (degree), 'o yoginaku sareu' 'forced to'(assertion). Level A contains 83 items and Level B 106. Many of them are characteristic of

written / formal style.

We would like to make a few overall comments. The authors seem to have made a conscious effort to include such current topics as the destruction of the ozone layer ,cellular phones ,dioxin ,and GLAY (a popular Japanese rock group). This is good in that the materials can also be used for instruction in Nihon Jijyo' the latest in Japan' especially outside Japan. ⑤

The only worry is how this might affect the shelf-life of the books. At the beginning of each section, the authors took pains to provide study tips or learning strategies, but these are all in Japanese. ⑥The answer booklet simply gives answer keys and provides no explanation. Therefore, especially in JFL contest, these books are accessible only to advanced learners as self-study materials. In a classroom context, learners should be able to work on many of the exercises with the teacher's guidance. We found a handful of errors ranging from a simple typographical errors to questions with two possible answers, but for first editions, the errors are few and far between.

Overall, these books function well as kitsu for preparing for the JLPT. They also go beyond that to provide diagnostic tools and valuable exercises that teachers can make good use of with intermediate to advanced learners.